

大学共通科目における体育実技の意義： 「脱・能力主義」を实践する場としての集団球技

平 田 智 秋

1. はじめに

青山スタンダード科目には、学部・学科を問わず、多彩な専門を志す学生が集まる。体育実技もその例外ではない。そのような学生が集まる科目において、何を学修目標として掲げるべきだろうか。近年の大学教育では、能動的な課題探究能力の育成や人間形成の促進が強く求められている。この背景には、社会構造の変化に伴い、AIには果たせない役割を担う人材が求められていることがあるだろう。これに関連して、職場や地域社会で多様な人々と協働するために必要な基礎能力である「社会人基礎力」を育成する重要性が高まっており、体育実技はその有効な手段の一つとされている。

本稿では体育実技の意義を、単なる能力の育成に留めず、さらなる先を見据えた視点を提案する。最初に社会人基礎力とライフスキルの概念を整理し、体育実技がこれらの能力向上にどのように寄与するかを検討する。次に筆者らの調査データからも明らかになった、社会人基礎力という能力の曖昧さを指摘する。そして、勅使川原（2024）の言説をひきながら、能力を測定し序列化すること自体の問題を論じる。これらを通じて「能力主義を超えた」新たな教育目標を提案したい。

学生は就職先を選べる。しかし、ともに働く上司や同僚、そして顧客は選べない。これは社会人なら誰もが直面する現実である。「偶然に出会った人との仕事」を円滑に進められる人になるためには、「誰と組んでも、成員の長所を活かして協働する態度」が重要となるだろう。体育実技、特に「ランダムにチームのメンバーが決まる」状況が必然的に発生する集団球技は、能力主義とい

大学共通科目における体育実技の意義：
「脱・能力主義」を実践する場としての集団球技

う一元的な評価軸を超えた協働性を体得する絶好の場となりうる。本稿では、学生が社会で直面する「選べぬ他者と共に成果を出す」という課題に有用な態度を涵養する場として、共通科目としての大学体育の可能性を考える。

2. 社会人基礎力とライフスキル：概念整理と体育実技への示唆

2.1 社会人基礎力とライフスキルの概念

社会人基礎力とは、職場や社会で自立的に活躍するために必要な基礎能力として経済産業省が2006年に提唱した概念である。具体的には、「前に踏み出す力（アクション）」「考え抜く力（シンキング）」「チームで働く力（チームワーク）」の3つの能力と、それぞれに関連する12の能力要素からなる。これは、職場や地域社会で多様な人々と協働して活躍するために必要な基礎能力とされ、多くの大学で教育目標として掲げられてきた（例えば、江口・小玉、2020）。

これに近い概念が、世界保健機関（WHO）が提唱するライフスキルである。これは「日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」であり、意思決定能力や対人関係の構築と維持能力など10の主要能力で構成されている。社会人基礎力とライフスキルの重要な共通点は、どちらの能力も生得的なものではなく、教育などを通じて後天的に獲得・育成される能力という点である（瀧本・木内・石道・中村・西脇、2018）。

2.2 体育実技による能力育成の実証研究

体育実技を通じたこれらの能力の向上に関する研究を概観する。引原ら（2016）は、卓球やバレーボールなどのネット型種目を通じて、社会人基礎力の12要素すべての項目が有意に向上することを示した。一方、演習形式の身体トレーニング種目では、課題発見力、計画力など5項目で有意な変化が見られなかった。これを受けて引原ら（2016）は、ネット型種目における言語・非言語的コミュニケーションの多さが、社会人基礎力を引き上げたとしている。

る。このように集団球技の場には、自然に成員間の多彩なコミュニケーションを促す機能がある。

石道ら（2016）は、体育実技の受講に加え「活動記録シート」で振り返りと自己評価をした介入群、実技受講だけの非介入群、体育実技を履修しない対照群に分け、社会人基礎力の変化を検討した。結果、介入群、非介入群は対照群に比べ、考え抜く力とチームで働く力が有意に高まった。介入群と非介入群との間に差がないことから、実技に参加すること自体の効果が、振り返りなど介入の効果よりも著しいと示唆された。

ここで瀧本ら（2018）は、振り返りの文章の量がライフスキルの向上に有効であると示している。体育授業の期間を通じ、ライフスキルの総合点は有意に高まったが、振り返り文章の記述数が増えるにしたがい、ライフスキルの計画性、情報要約力、感受性などが上昇した。振り返りは単に「すれば効果が望める」ものではないのだろう。多くの文章記述を要する、経験を丹念に再構成・咀嚼する過程が、ライフスキルの涵養に有効だと考えられる。

また奈良・木内（2021）は、自らの思いを相手に伝える「自己開示」を多く経験することが、ライフスキルの獲得を促すと示している。ソフトボールの実技で、自己開示経験が最も多かった群のみ、受講前後でライフスキルなどが向上した。これも同様に自己開示を「すればよい」のではなく、積極的に「自己開示を引き出す」実技環境のデザインが重要であると読み取れる。

これらの研究により、体育実技には学生の社会人基礎力やライフスキルの獲得・向上に寄与する効果が認められる。その際、受講生間のコミュニケーションを促すような種目選択や、質の高い振り返りや自己開示を導く環境づくりが必要だと考えられる。

3. 社会人基礎力概念の構造的問題：実証研究からの知見

3.1 宿泊型実習での調査結果

先行研究でその有効性が示されてきた社会人基礎力だが、その測定尺度には構成概念上の問題点が潜んでいる。筆者らがA女子大学で実施した3泊4日

大学共通科目における体育実技の意義：
「脱・能力主義」を実践する場としての集団球技

のスキー・スノーボード実習の受講生 36 名を対象とした調査の結果を以下に述べる。なお、データ解析の対象は実習前後に漏れなく調査に回答した 21 名とした。また、この調査は予め当該大学の研究倫理委員会の承認を得た。

結果、実習前後で社会人基礎力の 3 つの力すべてが有意に向上した（図 1 参照）。平均点をみると「前に踏み出す力」は実習前後で 3.39 から 4.04 点に（ $t(20) = 3.72, p = 0.001$ ）, 「考え抜く力」は 3.23 から 3.90 点に（ $t(20) = 3.3, p = 0.004$ ）, 「チームで働く力」は 3.60 から 4.15 点に有意に向上した（ $t(20) = 4.2, p = 0.000$ ）。この得点は 1 ～ 5 点で換算したので、可能な得点幅は 4 点である。その範囲の 10% 以上の向上が、いずれの能力にもみられたことになる。社会人基礎力を構成する 12 の下位尺度をみると、ストレスコントロール力（平均は前 3.51 → 後 3.94, $t(20) = 2.01, p = 0.058$ ）を除く 11 の尺度で得点が有意に高まった（ $|t_s|(20) > 2.61, p_s < 0.017$ ）。

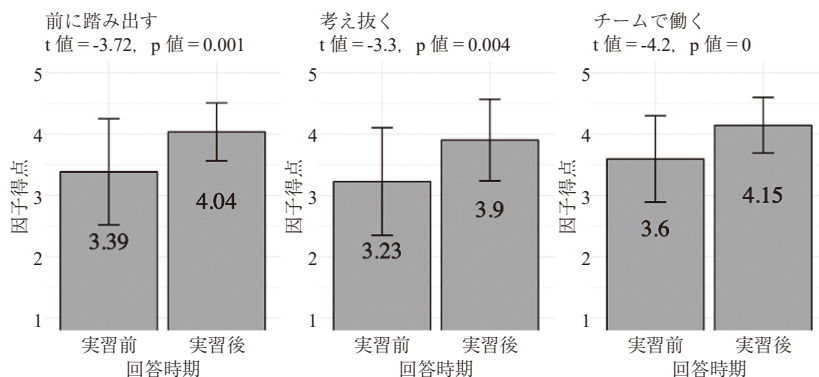


図 1：宿泊型実習前後の社会人基礎力 3 種の変化

3.2 構成概念の妥当性への疑問

しかし同時に、社会人基礎力を構成する 3 つの能力間には、すべての組み合わせにおいて、極めて高い正の相関がみられた（相関の最低値が $r = 0.813, p < .001$ ）。これは 3 つの力に分類されてはいるが、社会人基礎力が標榜する 3

つの力が、実際には分かちがたく結びついた、単一の概念を測定している可能性を示唆する。

この結果は、江口・小玉（2020）が指摘した社会人基礎力の問題点と一致する。彼らは社会人基礎力の調査データを分析した複数の研究が、本来の3つの力と12の下位概念とは異なる構造を抽出したことを示した上で、「社会人基礎力は、理論的な検討から導き出された概念ではなく、産学官の有識者による幅広い議論から、経験上重要と考えられる要素を抽出したものである」と述べている。つまり、社会人基礎力の土台となる構成概念が、経験知の集合体であって、その定義や理路は曖昧である可能性がある。

さらに江口・小玉（2020）は、社会人基礎力について2つの問題提起をしている。第一に、社会人基礎力は「キャリアの基盤」として、生涯にわたって必要とされる能力であるにもかかわらず、社会人を対象とした研究が限られていることである。第二に社会人基礎力の高い学生が就職後に活躍できているのか、社会人基礎力が高いことで、個人や所属組織が実際に恩恵を受けているのか、その効果の実証研究がほとんど無いことである。

ただし江口・小玉（2020）は社会人基礎力の有用性を認めている。「『社会人基礎力』という概念は、学生の教育や就職に向けた様々な活動の指標として、あるいは社会人のキャリア形成を図る上での重要な基盤として、非常に有用な概念と考えられる」と述べたうえで、「信頼性、妥当性が確認された尺度の開発と、その尺度を用いた学生、社会人を対象とした研究成果の蓄積が望まれる」としている。つまり社会人基礎力の概念にもとづいた測定尺度を改善し、客観的な知見の蓄積を通じて、社会人基礎力という概念の学術的な価値、社会的な信用を高めるべき、ということだろう。

4. 「能力主義を超えた」働き方論：新たな教育目標の理論的基盤

4.1 勅使川原（2024）らの能力主義についての批判

社会人基礎力の概念的な曖昧さに加え、より本質的な問題は、体育実技の効果を社会人基礎力やライフスキルなどの尺度得点で考量しようとする発想の根

大学共通科目における体育実技の意義：
「脱・能力主義」を实践する場としての集団球技

底にある「能力主義」であろう。教育社会学者の勅使川原（2024）は「働くということ『能力主義』を超えて」という著書で、さまざまな手法で個人の能力を評定・可視化し、能力の高い人を集めて組織を作ろうとする傾向を疑問視している。誰も一人では仕事をしておらず、個人単位の功績や貢献が分かりにくい、という仕事の協働性を前提として、「能力という、組織における『貢献度』の見える化というのは、そもそも仕事の協働性からして、便宜的なものなのです。」と述べている。つまり「個人単位の寄与が分かりにくい」協働性が仕事の本質であるのに、個人の能力を根拠として、仕事ができる（ようになる）かどうかを予測しようとする発想から再点検すべきなのだろう。

中村（2018）もまた、能力主義に批判的である。彼は学力や学歴といった従来の能力指標が正当性を失いつつある 1990 年代以降、コミュニケーション能力や課題解決能力といった、より曖昧で測定しにくい新たな能力が求められていることを指摘した。これらの能力が曖昧である以上、「ここまでやれば完璧」という明確な基準がない。結果、人々を際限のない「能力不安」に駆り立てているとしている。社会人基礎力もまた、彼の言う「新しい能力」の性格を帯びている可能性がある。

さらにサンデル（2021）も能力主義を疑っている。彼によると、個人の成功は本人の才能や努力だけでなく、恵まれた家庭環境や、その才能がたまたま社会に評価される時代だったというような、「運」の要素にも大きく左右される。このように成功には運も影響するにも関わらず、能力主義は成功しなかった者には自己責任の念と劣等感を植え付け、成功者に驕りをもたらし。その結果、社会の分断を深刻にした、とサンデル（2021）は主張している。

勅使川原（2024）に戻る。彼女は職場における組織としての活躍や優秀さは、個々の能力の総和ではなく、メンバー間の「持ち味」の組み合わせや、時に偶然性によって生まれる、と述べている。このとき、一元的な「正しさ」や「序列」に縛られず、能力主義を超えた「関係性」を重視する働き方が、組織や社会の可能性を広げる、としている。この視点に立つとき、大学生が体育実技を通じて身につけるべきは、能力主義が標榜する測定可能な「能力」よりも、「協

働のための素養や態度」であろう。

4.2 体育実技が涵養しうる「能力主義を超えた」素養

上に述べたような脱・能力主義の論考に沿って体育実技の意義を再検討したい。そうすると、体育実技を通じて学生が体得できる「能力主義を超えた」素養や態度は、以下の3点に集約できるだろう；

その第一は「他者と協力し合う姿勢」である。これはまさに勅使川原(2024)のいう「仕事の協働性」の体现である。詳細に言えば、個人の技能のみを発揮するのではなく、多彩な能力や特長をもつ人々と集団として協力しながら課題に取り組む姿勢、となる。体育実技、特に集団球技は、その構造からして、他者と協力し合うことが大前提となる環境である。この環境における活動の継続は、協働する姿勢へと学生を方向づけるだろう。

素養の第二は自他の持ち味を見出し、活かす態度であろう。集団球技では、ルールなどを柔軟に変更できる。共通科目における体育実技には多彩な学生が集まるので、身体能力や技能に大きなバラツキが生じる。その中でクラスが一つの場を共有するには、ルールや用具の工夫が有効である。成員に合わせて、ルールや用具を変更・工夫した種目は「アダプテッド・スポーツ」と呼ばれる。具体的には、バレーボールでラリーを継続させるために、3回以上のタッチで返球することを認めたり、ネットを低く設定したりするなどの工夫が、これにあたる。

佐藤(2019)は体育実技にアダプテッド・スポーツを採り入れ、運動の得意な学生に、どうすれば苦手な受講生が楽しめるかを考えるよう求めた。結果、運動の苦手な学生のレポートには「チームに少しは貢献できた」とあり、この受講生が本来もっていた身体能力を発揮し、組織に貢献した実感を得たことがわかる。また運動が得意な学生は「自分ひとりだけが楽しいのではなく、上手に役割分担をして1人1人が自分の個性や得意なことを発揮できた」と書いていた。この学生は自らの運動能力を活かすことのみにとどまらず、チームの成員の持ち味を見出し、それぞれを活かそうとチームをまとめることに取り組

大学共通科目における体育実技の意義：
「脱・能力主義」を実践する場としての集団球技

んだのだろう。集団球技において成員全員が楽しめるようルールを工夫する過程では、自他の持ち味を見つけ、活かす態度が涵養されると考える。このように体育実技でみられるような「自分の内側に眠る可能性を最大限に発揮したい」という意欲を川村・窪田(2022)は、マズローの欲求階層説の最高次である「自己実現の欲求」に位置づけている。

体育実技を通じて学生が体得すべき態度の3番目は、「失敗を受け容れる寛容さ」である。能力主義の下では失敗は能力の不足を意味する。しかし学習や成長を目指すならば、挑戦や試行錯誤に伴う失敗がつきものである。失敗を受け容れ、吟味し、改善を試みる過程が学習の礎となる。失敗は成長のきっかけとも言える。サイド(2016)は、失敗について「ビジネスリーダーや教師ばかりでなく、我々も社会人として、また親として、失敗に対する考え方を変えていかななくてはならない。子どもたちの心に、失敗は恥ずかしいものでも汚らしいものでもなく、学習の支えになるものだ」と刻みつけなければならない。互いの挑戦を称え合おう」と書いている。

集団球技では、誰しものが大なり小なり失敗する。バレーボールで考えると、得点が決まる場面では、誰かがミスをしている。そして得点が決まる場面で、失点したチームは「何が悪かったのか」、得点したチームは「何が良かったのか」、について即時にフィードバックを得られる。プレイの成否など、結果に関するフィードバックは、より詳細な試行錯誤の材料となり、学習を方向づける。このようなフィードバックの豊富さが集団球技の大きな特長であろう。そして失敗が皆無というゲームはあり得ない。したがって集団球技では、学習・向上の糧として失敗を受け容れる態度が、自ずと育まれるだろう。

5. 体育実技の役割：「選べぬ誰かとの協働」を実践する場

5.1 体育実技で学生に伝えること

上の「能力主義を超えた」素養や態度をふまえると、体育実技で学生に伝えるべきメッセージは次のようになる。

大学の一般科目における体育実技には、社会人になるためのレッスンとして

の一面があります。そしてみなさんは就職先を選べるけれど、上司や同僚は選べません。顧客も選べません。つまり「誰と働くか」を選べません。それならば「誰と組んでも、自分を含む成員の持ち味を活かす工夫をして、心地よく仕事ができる」という態度を、大学生のうちに身につけておくべきでしょう。

バスケットボール、バレーボール、バドミントンなどの集団球技では、ランダムにチーム分けをします。集団球技のチームでメンバーの能力や性格を見極め、持ち味を活かす作業は、仕事の場面で同じことをするよりずっと容易いはずです。楽しく、真剣にゲームを重ねることは「誰と組んでも心地よく仕事ができる」態度を身につける、最高のレッスンとなるでしょう。大学の共通科目で体育実技をする目的として、「誰と組んでも、良い工夫ができるよ」という自信をつけて下さい。

6. 結論

本稿で展開してきた議論をふまえると、大学の一般体育、特に集団球技は、社会人基礎力に代表されるような特定の「能力」を涵養する場としてではなく、「能力主義を超える実践の場」として位置づけてもよいだろう。

学生は就職先を選べても、そこで働く同僚や顧客は選べない。体育実技におけるランダムなチーム分けは、この「選べぬ誰かと一緒に、仕事を進める」状況の絶好のシミュレーションとなる。技能レベルも、性格も、価値観も異なるメンバーと、いかにして一つの目標に向かっていくべきだろうか。この過程では、個人の能力の高さ以上に、互いの「持ち味」を理解し、活かし合う工夫や、円滑なコミュニケーション、失敗を許容する態度が求められる。

体育実技を「誰と組んでも、自分を含めた成員の持ち味を活かす工夫をして、心地よく協働できる」態度を学ぶためのレッスンとして位置づけ、この教育的意図を学生と明確に共有し、実践する場を提供することが、今後の体育に求められるだろう。体育実技は、単なる身体活動の場に留まらず、学生が複雑で予測不能な社会を生き抜くための、より本質的な知恵と態度を育むための機会を提供できると考える。

大学共通科目における体育実技の意義：
「脱・能力主義」を実践する場としての集団球技

参考文献

- 江口圭一，小玉一樹（2020）．社会人基礎力に関する一考察．経営研究：福山平成大学経営学部紀要，16，33-54.
- 引原有輝，森田啓，若林育，金田晃一（2016）．実技種目の異なる大学体育授業が社会人基礎力の育成に及ぼす影響．大学体育学，13，16-25.
- 石道峰典，西脇雅人，中村友浩（2016）．体育実技授業における社会人基礎力育成を意図した介入効果の検証．大学体育学，13，26-34.
- 川村若菜，窪田辰政（2022）．大学生からみた大学体育の意義・価値－A 大学における受講理由質問紙調査から－．大学体育研究，44，73-78.
- 中村高康（2018）．暴走する能力主義．筑摩書房.
- 奈良隆章，木内敦詞（2021）．大学体育授業における自己開示経験がライフスキル獲得に及ぼす影響．体育学研究，66，515-531.
- 瀧本真己，木内敦詞，石道峰典，中村友浩，西脇雅人（2018）．大学体育実技授業の振り返り文章数を多く記述するほどライフスキルの獲得が促進される：大学体育授業を対象とした縦断研究．大学体育学 15，3-11.
- サンデル，M. J.（2021）．『実力も運のうち 能力主義は正義か？』（鬼澤忍，訳）．早川書房.
- 佐藤紀子．（2019）．「アダプテッド・スポーツ」を用いた大学体育授業が初年次学生のライフスキルおよび自己肯定感に与える影響．総合文化研究，24，1-2.
- サイド，M.（2016）．失敗の科学——失敗から学習する組織，学習できない組織（有枝春訳）．ディスカバー 21.
- 田代浩二（2017）．「大学体育」の意義を考える—授業実践の一見地から—．スポーツ健康科学紀要，14，47-54.
- 勅使川原真衣（2024）．働くということ「能力主義」を超えて．集英社新書.